

学生が行う障害児の放課後活動の有効性

～学生がもたらす保護者の安心～

東京福祉専門学校 児童福祉科 障害児支援専攻

浅田 岩井 森谷
馬場 前田

1、はじめに

障害児にとっての放課後の過ごし方は、家庭で1人または、母親と2人きりで過ごすことが多く、遊び方もテレビを見る等と単調になり『豊かな余暇を過ごせていない』というのが現状である。現在、障害児を対象とした放課後活動は、全国で少なくとも500ヶ所以上と言われている。しかし、放課後活動の設置状況は地域間の格差が大きく『足りていない』というのが実態である。また、経済的負担が大きいことや子ども1人あたりが通える日数が少ない、通いたくても通えない等といった『待機児童』がいることも放課後活動の問題点として挙げられる。以上のことをうけ、本校の位置する江戸川区の障害児を対象に実際に障害児の放課後活動の問題点とは、どのようなものなのかを明らかにしたいと考え、研究Ⅰを行った。

また、東京福祉専門学校では授業の一環として障害について学ぶ学生が障害児を対象とした放課後活動(以下:障害児広場)を企画、運営している。そして本研究を行った私たちは、週1回この活動を企画、運営してきた。障害児広場は、保育を学ぶ私たちにとって、実際に障害児に関わり学ぶことのできる貴重な場になった。また、大学や専門学校において、学校に障害児を招いて放課後活動を運営しているのは他に聞いたことがなく、珍しい試みであると言える。さらに、学校の空き教室と学生のマンパワーを効果的に利用した障害児支援の場であると言えるだろう。しかし私たちは、保護者がプロではない学生が行う活動に対して『学生は障害に対する知識が少ない』『安全に活動が出来るのか』等の不安を抱くのではないかと疑問が沸いた。そこで、学生が行う放課後活動に対する不安はどのようなものなのかを具体的に明らかにすることを目的に研究Ⅱを行った。また、実際に子どもを広場に参加させて不安が軽減した保護者は、どのようにその不安が変化していったのかを明らかにすることを目的とし、研究Ⅲを行った。

2、研究Ⅰ：江戸川区における障害児の放課後活動の現状

[目的] 江戸川区の障害児の放課後活動の現状を知る。

[仮説] 障害児の放課後活動に参加したいのに出来ない待機児童が多数いるという実態が、研究対象にした江戸川区でも言えるのではないか。

[方法] 障害児の放課後活動の必要性に関するアンケート調査を実施。

[対象] 江戸川区にあるK特別支援小学校に通う子どもの保護者 151名(内、有効回答103名)

[結果]

図1 放課後活動の参加率

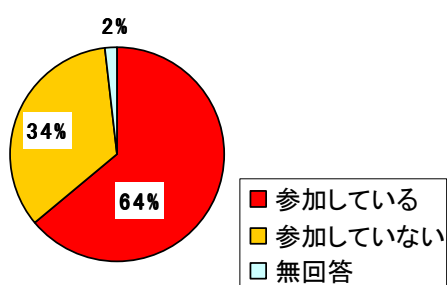


図2 放課後活動の必要性

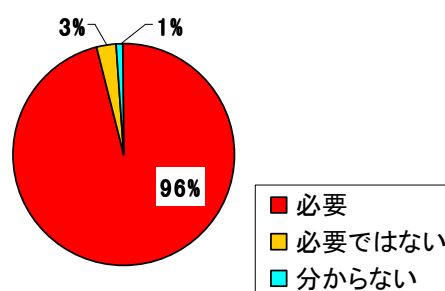


図3 必要である理由

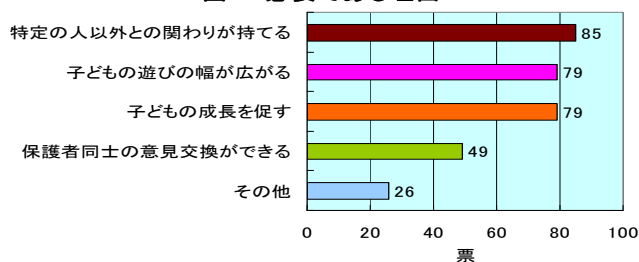
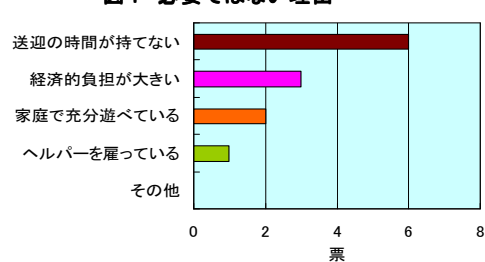


図4 必要ではない理由



K特別支援小学校では96%が放課後活動を必要と考えていた(図2)。その理由として、学校や家庭以外の人との関わり、子どもの遊びの幅を広げたい等と放課後活動を求めていることが分かった(図3)。しかし、実際には34%が参加していないという現状であった(図1)。参加したくてもできない理由として、自由記述より放課後活動を行っている場が少ない(22票)、入会が難しい(5票)という意見が挙げられた(図4)。以上のことから江戸川区でも障害児の放課後活動の場が少なく、求められているということが分かった。また、場が少ない為に定員の制限や遊ぶ環境、遊びの制限があり、伸び伸びと活動することが難しい現状にあると言えるだろう。

3、研究Ⅱ：障害児の保護者が抱く学生が行う放課後活動に対する不安

[目的] 障害児の保護者が抱く学生が行う放課後活動に対しての不安は、どのようなものなのかを具体的に明らかにする。

[仮説] 放課後活動を学生が行うことに対して、保護者は不安を感じるのではないかと。

[方法] 「障害児広場」を説明する資料を添え、学生が行う放課後活動に関するアンケート調査を実施。

[対象] K特別支援小学校に通う子どもの保護者 151名(内、有効回答103名)

[結果]

図5 学生が行う放課後活動に対する不安

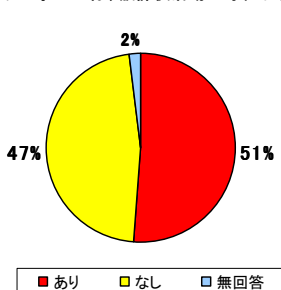
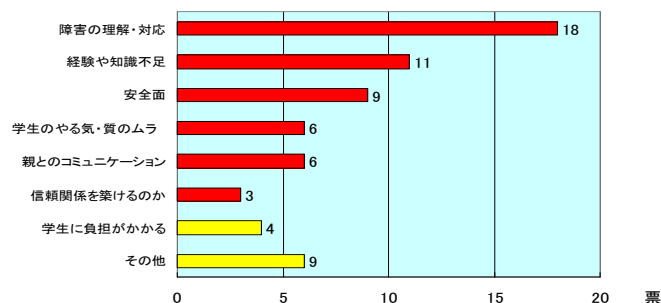


図6 学生が行う放課後活動に対する不安



K特別支援小学校では、51%が学生が行う放課後活動に対して不安を抱いていた。その理由として、「学生は障害を理解し対応が出来るのか」「経験不足」などの「学生の資質に対する不安」が上位を占めた。その他では、「障害のある子どもを他人に預けることへの不安」、「活動内容が分からない」といった意見が挙げられた。以上のことからアンケートの自由記述より学生が行う放課後活動に対する不安の中でも80%が『学生の資質に関する不安』であることが分かった。

4、研究Ⅲ：「障害児広場」に対する不安が軽減した要素

[目的] 学生が行う放課後活動に子どもが参加した保護者の不安が軽減した要素がどのようなものなのかを具体的に明らかにする。

[仮説] 学生の態度により保護者の不安は安心に変わるのではないかと。

[方法と対象]

障害児広場に参加している保護者(11名)に「学生が行う放課後活動に対する不安」についてアンケート調査を行った。結果は図7・8のように、3名の保護者が活動に参加する前(4月)に比べ、アンケート実施当時(10月)には不安が軽減されたと回答した。

図 7

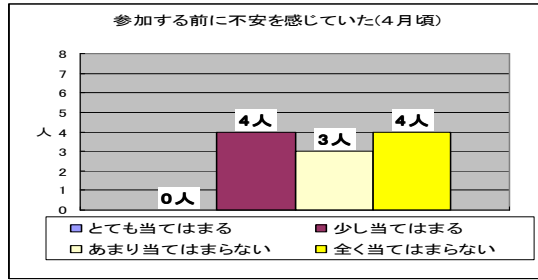
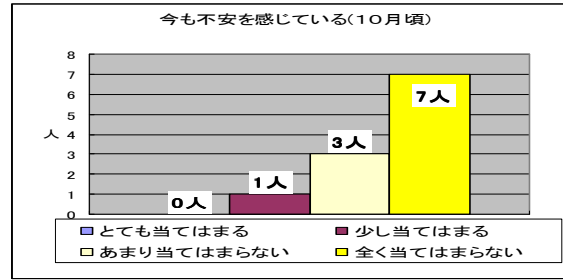


図 8



その3名の保護者の子どもについての様子、その保護者の不安は表1に示す。

表 1 保護者の不安

保護者 (仮名)	ユカさん (Aくんの母親)	ミキさん (Bくんの母親)	リナさん (Cちゃん、Dくん、Eくんの母親[3兄弟])		
子どもの特徴	[Aくん] ・小学3年男児 ・重度の自閉症 ・何でも口に入れる ・多動	[Bくん] ・小学6年男児 ・重度の広汎性発達障害 ・気持ちが伝えられない ・言葉での会話が不可能	[Cちゃん] ・小学5年女児 ・精神発達障害 ・融通が利かない ・言葉での説明が苦手	[Dくん] ・小学5年男児 ・広汎性発達障害 ・聴覚過敏 ・こだわりが強い	[Eくん] ・小学5年男児 ・広汎性発達障害 ・聴覚過敏 ・こだわりが強い
前の不安	・子どもが先の見通しが読めず、学生に何かしてしまうのではないかと不安	・初めて会う人が苦手な自分の気持ちが伝えられずに嫌な思いをしてしまうのではないかと不安	・聴覚過敏 (Dくん、Eくんに関して)		

障害児広場に参加した子どもの保護者の不安は研究Ⅱの結果とは異なり、学生に対するものではなく、「子どもが学生に何かしてしまうのではないかと不安」、「子どもが自分の気持ちを伝えられずに嫌な思いをしてしまうのではないかと不安」などの子どもに対する不安が挙げられた。この結果がなぜ研究Ⅱと異なったのかはわからないが、研究Ⅲでは、それぞれ3名に、障害児広場をどのように捉えていたのか、2回に分け合計2時間程度の半構造化インタビューを行った。

[結果]

図 9 保護者の心の変化と安心要素

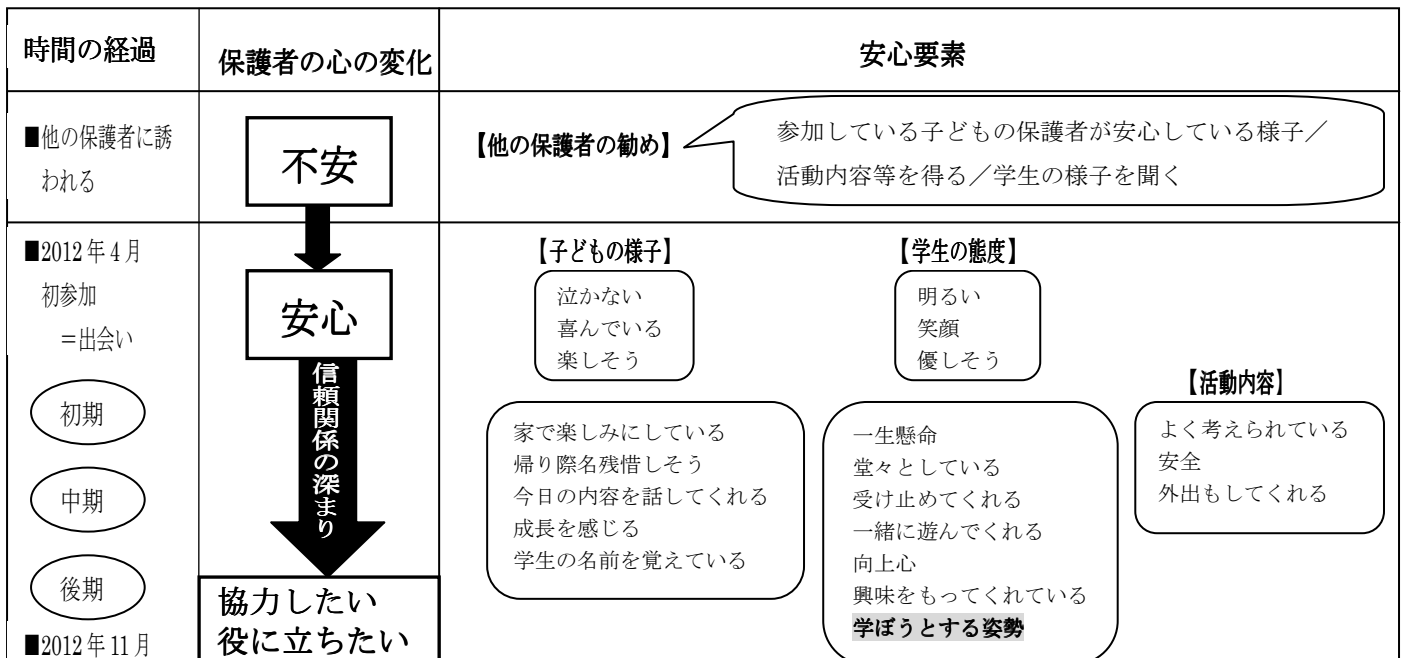


図9で示したように、保護者の気持ちの変化として、「不安」から「安心」へと変わり、さらに時間を経て関わることで信頼関係が深まり、「学生に協力したい」「役に立ちたい」という気持ちが生じていたことがわかった。実際、学生の学びに繋がるという思いから学校で行われる発表会に声をかけてくださったり、本研究にも「学生さんたちの人柄に惹かれてお受けしました」と快く協力していただいた。また、活動に参加した後の安心の要素は、仮説に挙げた【学生の態度】に加え、

【子どもの様子】【活動内容】の3つに分類できた。それぞれの安心要素の詳細は図の通りである。

また、この3名とも、昨年以前から障害児広場に参加している**【他の保護者の勧め】**が参加のきっかけであったことが分かった。それらは、他の保護者も安心して預けているという安心、活動をイメージできるという安心を生み、「学生の資質に対する不安」の現れなかった要因になっていた。

[考察]

インタビューの結果より**【学生の態度】**から得た安心要素の一つとして学生の「**学ぼうとする姿勢**」が挙げられた。ここでは、学ぶ姿勢について深く考察を行う。

私たちは子ども一人ひとりをもっと理解したいと思い、子どもの受入れや受渡し時に保護者に積極的に分からないことを聞くように努めていた。その私たちの姿勢に対して保護者は以下のように語っている。「(分からないことを聞くことは)普通だと(思います)。聞いてくれて有り難いかなって(思います)。誤魔化す訳ではないんで正々堂々としてくれて有り難いと思いますね。あー今日はこんなことしてしまったのか、悪いことをしてしまったなって親が思うし、そうしたら今度こうして欲しいって言えるので親としてはそっちのほうが有り難いですね(ユカさん)」「分からなくて当たり前なので、親でさえ困るときがしょっちゅうですから。逆にどんどん聞いてもらったほうが不安は拭えると思います(リナさん)」また、ミキさんは新しく出来たデイサービスに対して以下のように語っている。「これは改善してもらおうっていうのは伝えましたね。何でもそうですけど障害者は難しいですよ。なんでも完璧で始まるのは無いと思います。私も勉強になります」このように初めから私たち学生に完璧な活動を求めているのでは無く、「一緒に作っていききたい」という考えがそれぞれに読み取れた。

一緒に作っていくためには、保護者と学生のコミュニケーションが大切だと言える。そのツールとして私たちは連絡帳やお便りなどでやりとりを行った。連絡帳では、活動内容だけではなく、今日の子どもの様子や感じたことを書いた。それに対しては「子ども一人ひとりをちゃんと見ててもらってるんだっていうのが私は凄く嬉しかったですね(ユカさん)」と、保護者の安心へと繋がっていることが分かった。また、「(私が代わりに)伝えないと、(子どもは)伝えられない子なので(ミキさん)」と家での様子を保護者から学生に伝えられる一つ的手段にもなり伝えられているという安心に繋がっていた。このように**保護者と学生がコミュニケーションを取ることで、伝え合う場やツールを積極的に持つことで、信頼関係を築くことが出来たといえるだろう。**

5. まとめ

本研究を通して、①江戸川区での障害児の放課後活動が少ない現状 ②学生の行う放課後活動に対して「学生の資質」に不安を感じる障害児の保護者もいるが、活動を実施し継続している中で、不安から安心、さらには私たち学生に「協力したい」「役に立ちたい」という信頼関係を築くことが可能であること ③活動を通して安心を与える要素が**【子どもの様子】【学生の態度】【活動内容】**であること、の3点が明らかになった。その中でも**【学生の態度】**の一つである「学ぼうとする姿勢」はプロではない学生の弱みではなく、むしろ強みになり、保護者の安心に繋がることは私たちの自信に繋がった。私たちは現場に出たときも、この障害児広場で学んだ「学ぶ姿勢」を始め、「明るさ」「笑顔」等の必要な態度を忘れずに保護者支援を行っていききたいと思う。

そして、他校にも学生が行う放課後活動が広がっていくことが必要であると感じた。1つでもこのような活動が増えることで、学生が障害児と関わる場となり、1人でも多くの人に障害児の理解者が増えていくのではないだろうか。そのために江戸川区の障害児の保護者を含め、学生が行う放課後活動があることを沢山の人たちに発信していくためにはどうすべきか考えることが今後の課題であるといえるだろう。

〈参考文献〉 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会編, 障害のある子どもの放課後活動ハンドブック, 株式会社 かもがわ出版, 2011年